

バイリンガル教育の可能性への試み  
ー 移住している家族の事例を通してー

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター  
関 楨允

外国に移住しているバイリンガルの家族は、言語的・文化的問題を抱えている。それゆえに、多くのバイリンガル家族の親が子どものバイリンガル教育について悩んでいる。外国に住みながらも自分の子どもに母国の言葉だけでなく文化を保持させたいという希望を持つ親は多い。

外国で同じ母国から移住した人が集まって住む地域（以下集居地域）のバイリンガルの家族は、地域や公立学校でバイリンガル教育を受けることが可能である。しかし、同じ母国から移住した人が少ない地域（以下散居地域）のバイリンガルの家族たちは、それらの教育を受けることができない。

本研究では、集居地域、散居地域に関わらず、家庭内でバイリンガル教育ができることを想定した。そして、日本に移住している韓国家族の小学1年生の子どもを対象に、1人で韓国語を書く能力の向上を促す支援法の検討を目的にしている。また、書く能力の向上につれて、二言語における4つの言語能力（言う、聞く、読む、書く）のバランスがとれる均衡バイリンガルに近づけることを目的にした。

その結果、家庭内でもバイリンガル教育が可能であることが示唆された。対象児の書く能力の向上につれて、読む能力も向上した。そして日本語と韓国語の二言語における4つの言語能力のバランスも均衡に近づいたと考えられた。また、第一言語能力の向上が、第二言語能力をも併せて伸ばすことが確認された。二言語における読む能力、書く能力が高まることによって、言語能力と使用領域の増加に繋がり、文化的アイデンティティ、自己アイデンティティの形成に大きな影響を与えることが分かった。